

Annals of the Fukuyama City University Extension Center

ISSN 2186-8255

福山市立大学教育研究交流センター
年 報

vol.8
2018

Annals of the

F

Extension

C

Center

U

はじめに



2018年度（平成30年度）教育研究交流センター年報の発刊にあたって

福山市立大学 教育研究交流センター長
渡邊 一成



本学の教育研究交流センターは、開学と同時にスタートを切って丸8年となりました。

今年度は、6大学連携の4年目となり、備後圏域にある6大学（尾道市立大学、県立広島大学、福山大学、福山平成大学、福山職業能力開発短期大学校、福山市立大学）が集まり、備後圏域の知のステップアップのために議論を続けています。一昨年より開催している「特別企画 6大学エクステンション連携講座 びんご圏域6大学の人気講座紹介！！」では、大学が存しない府中市の府中市文化センターにて講座を開催し、地元高校生も含め、多くの方々に参加いただきました。スタートを切った4年前よりも、より緊密に議論を深め、引き続き、各大学等の公開講座の情報を一元化したチラシ作成等、備後地域にとって意味のある6大学連携をめざして進めております。

また、教育研究交流センター主催の公開講座は、大学が広く一般に知見を広める場でもあり、引き続き、当センターの重要な活動の場であり続けております。

今年度につきましては、視点を大学の重要な役割である「知の共創」という共通テーマで、全5回の公開講座を開催いたしました。普段の生活では知ることのない、専門的で興味深いテーマを様々な側面から取り上げ、新たな世界の再発見につなげていただくことを目的として、様々なジャンルで活躍されている方を講師としてお招きしました。

さらに、6回目となる「ふくやまサイエンスフェスティバル」は、福山の子どもたちにも人気が高い事業となっており、今年度のフェスティバルは雨天での開催となりましたが、多くの子どもたちの参加が得られました。

当センターでは、学外へのアウトリーチ機能として、上述の公開講座等とともに、昨年度より備後圏域の高等学校と地域探究活動に取り組む高大連携事業や、一般社団法人教育ネットワーク中国が取り組む高校生向けの公開講座（社会の動きを統計データ・GISで見る・表現する）を実施し、新たな地域貢献活動にも取り組んできております。

これら当センターの活動の成果を取りまとめ、年報として記録に残すことといたしました。これも学内外の多くの方の支援の賜物であり、改めて感謝申しあげる次第です。

来年度の取組内容も決まりつつあり、自信を持って新年度を迎えたいと思っています。

今後とも、皆様のご意見やご要望も踏まえながら、創意工夫を凝らして活動内容を充実させていく所存ですので、来年度以降も引き続きご協力いただきますようお願い申しあげ、発刊のご挨拶といたします。

2018年度（平成30年度）教育研究交流センター年報 目次

	ページ
1 はじめに	
2 福山市立大学教育研究交流センターの目的・概要	1
3 地域連携活動	3
（1）地域連携事業 学生関わった地域活動	
①福山の魅力づくり・地域活性化	
事例紹介	5
・福山駅前等歩道空間社会実験	
・関係人口創出事業	
・離島振興「奄美プロジェクト」	
②学習・教育の支援	9
事例紹介（高大連携事業）	
・福山市立福山高等学校	
・岡山県立笠岡高等学校	
（2）公開講座	13
①公開講座	14
事例紹介 シリーズ「知の共創」	
②特別講演会	19
事例紹介 さよなら・公開講座	
③国際交流	21
事例紹介 多文化共生シンポジウム	
④ふくやまサイエンスフェスティバル	22
（3）連携事業	25
①産学官連携事業	
②社会人セミナー	
事例紹介（連携事業）	28
・道の駅舞羅IC千代田トイレ改修プロジェクト	
・旧白男川小学校廃校リノベーション「きららの楽校」プロジェクト	
③大学間連携事業	29
（4）審議会等委員・講演会等講師派遣	30

■福山市立大学教育研究交流センターの目的・概要

1 目的

教育研究交流センターでは、全学の協力のもと、大学が有する知的資源を活用し、地域交流及び生涯学習等に関する調査・研究並びに教育事業を行うとともに、地域連携及び国際交流等に関する取り組みを推進し、本学の教育研究並びに地域社会の発展に寄与します。

2 業務内容

教育研究交流センターは、公開講座などの学外向け事業の企画・立案を行うとともに、地域課題と研究内容を結び付ける窓口として、各種の相談業務を行います。

(1) 地域交流事業

大学施設の一般公開事業など、地域に広く門戸を開放し、地域に親しまれ信頼される大学をめざします。

さらに、都市型キャンパスの好立地を生かし、様々な社会の担い手が集い、語り、共に学ぶ環境づくりを進めます。

(2) 公開講座、連携事業、ワークショップ

地域に関わる関心や興味深いテーマを様々な側面から取り上げる講演会を開催します。また、少人数で参加型のワークショップを開講します。

「びんご圏域」の大学等の連携を基盤に、地域の抱える問題の解決やアウトリーチ活動をより発展させるため、圏域内の連携を図ります。

(3) 受託研究・共同研究事業

大学教員や研究者のノウハウや蓄積を社会に還元していくため、地域のシンクタンクとしての機能の充実をめざします。

地域や産業界、行政などのニーズ（課題）の情報収集・分析を行うとともに、本学の研究機能とをマッチングさせる窓口になります。

(4) 国際交流事業

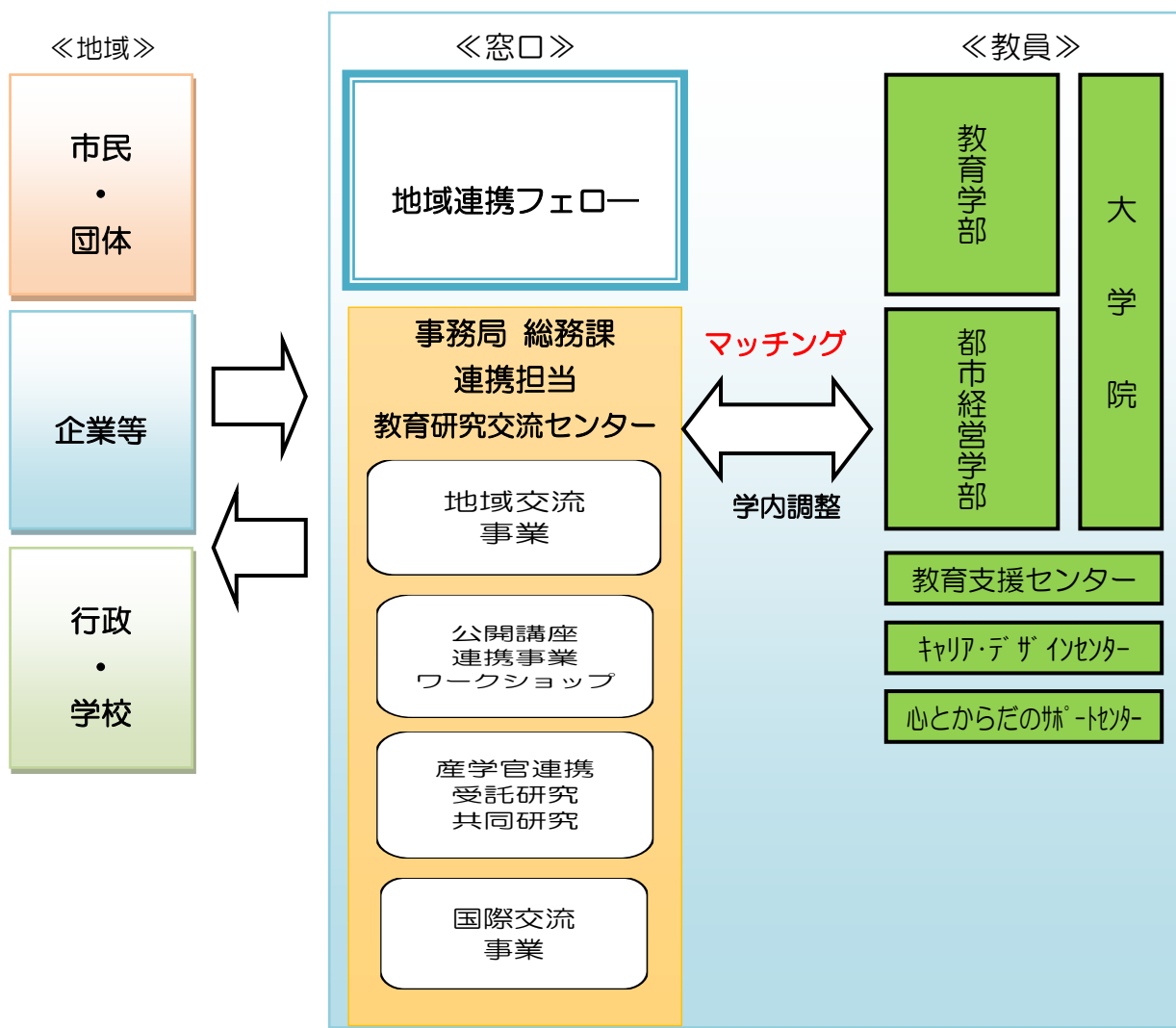
海外の教育機関との連携交流を推進し、学術の向上と地域貢献に寄与します。

3 所在地

福山市港町二丁目 19 番 1 号

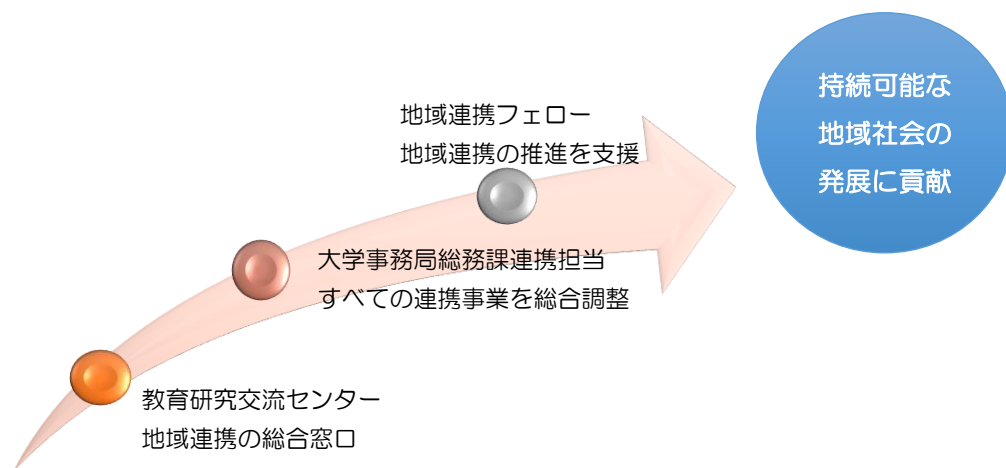
福山市立大学内 管理棟 1 階

4 福山市立大学の地域連携事業の推進体制



● 地域連携フェロー

本学では地域との連携・交流を効果的に進めるため、地域連携・地域貢献活動で特に経験と実績のある教員を「地域連携フェロー」として配置し、地域の課題に関する調査・研究、地域連携のための連絡・調整等に取り組んでいます。



■地域連携活動

(1) 地域連携事業 学生関わった地域活動

教員の指導のもと学生の学びを通じた地域活動によって、「キャンパスは街 学ぶのは未来」のキヤッチフレーズを実践します。

①福山の魅力づくり・地域活性化

福山駅前等歩道空間社会実験 OPEN STREET FUKUYAMA	中心市街地の活性化を目的とした、歩道空間等の活用による人の動きや流れを調査・分析
福山駅前 “魅力発見”フィールドワーク	福山駅前の新たな魅力を探る調査活動
スリジェレーヴ 学生団体 e n + (エンプラス)	福山駅前で行う大学祭をテーマに、近隣大学の学生団体が連携してイベントを開催
福山城築城 400 年記念事業	2022 年の福山城築城 400 年に向けた記念事業の実行委員会・イベント部に参画
福山市のシンボル“ばら”のまち づくりサポート事業	2024 年の「世界バラ会連合世界大会」に向けた啓発活動等に協力
歴史のまちづくり 地域の歴史、文化の調査活動	福山市神辺町「御領遺跡」古墳群や春日町「浦上千歳楽」など地域の祭りから歴史・文化の調査活動
関係人口創出 【海と山】関係人口モデル事業	福山市内海町と山野町をモデル地域に、空き家再生や地域の魅力の発信を支援
地域アクティブ化カフェ “持続可能な地域活動を考える”	福山市田尻町の地域活性化を支援（交流拠点の整備、地域の魅力の発信を支援）
軒空き家プロジェクト	日本遺産に認定された福山市鞆の浦で地域と連携した空き家再生の取り組み
離島振興「奄美プロジェクト」	鹿児島県大島郡瀬戸内町で空きスペース（空き家・空き地）の利活用に向けて、住民参加のワークショップを開催
福山市内のイベント支援	（学びを活かした活動支援） ①地域特産品の開発（うずみフェスタなど） ②被爆アオギリ紙芝居（まつながカープヂューなど）



ばらのまちづくり
啓発活動に協力
大学生によるイベントの
企画・運営、情報発信に
期待が高まる！



歴史のまちづくり魅力
発見フィールドワーク
学生の視点で、地域の
魅力を調査・研究



地域イベントでの学び
を活かした活動支援
参加した子どもたちに
読み聞かせ。(平和の
大切さを伝える)



地域アクティブ化カフェ
持続可能な地域の発展を
地域住民と話し合う。
(学生による提案)





FUKUYAMA CITY UNIVERSITY
福山市立大学



駅前社会実験 Open Street Fukuyama を
学生が City jack !!

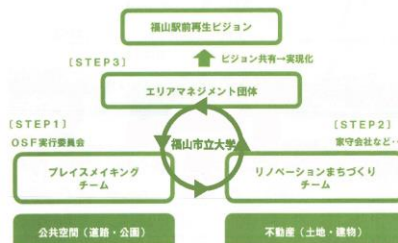
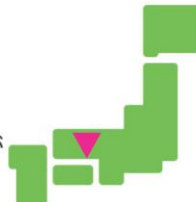
ばらの妖精「ローラ」

大学 概要

2011年に設立された福山市立大学は、福山市全体をキャンパスとした実践的な学びで、21世紀の地域の課題、社会の課題、そして世界の課題に真正面から挑戦する新しい公立大学。学生数1,000人。2学部で、都市経営学部と教育学部がある。

福山市 概要

広島県第二の都市。
人口47万人。駅が寂しい。
「何もないとは言わせない」が一時期キャッチコピーに。



OSF 概要

寂れかけている駅前の再生のため、「まちを楽しむ」を目標に始めた取り組み。福山商工会議所の実行委員会に第1回目から参画し、企画実施。第2回目をレポートします。

目指す方向性

OSFの活動を通し、近年、活発になっている福山駅前でのリノベーションまちづくりなどの福山駅前再生の動きを、本学が中心になって促進する。

アイネス内庭



子供連れの客層を巻き込む企画。
移動式動物園（モルモット）、ニュース
スポーツ体験やアートキャンプ

成果

ファミリー層に受けた。
(普段駅前にいない)

駅前の変化



ベンチや人工芝などを歩道に設置。
お店とまちなかスポーツテストが大盛況!!

成果

常設を望む声が多かった。

出前方式



外でお酒を飲めるスペースを設置。
カップルや仕事終わりのサラリーマンの0次会に。

成果

出店者全員が利益を出すことに成功
周辺のお店にも大きな波及効果

発信したいこと・相談したいこと

- ・学生目線のイベントの企画がマンネリを脱却できた
- ・他大学では、地域課題にどんなアプローチをしているのか?
- ・第3回は学生に刺激を受けた大人たちによる成果を期待したい
- ・どんなお店が市民に需要があると思うか?



公式サイトはこちらから

内海町

うつみひとつなぎプロジェクト -U・TSU・MI-

地域住民の目標

- ・ 100年後も持続的に生活していける地域環境の構築
- ・ そのために、移住者(特に子育て世帯)を増やしていくことが重要

内海町の印象

- ・ 地域に愛着を持って活動している人が多い。
- ・ 風光明媚で、海産物などの資源も豊富。
- ・ 新幹線が利用できる駅から30分ほどで来られる好立地の島。
- ・ 大都市からすれば無名の地。内海ならではの特色をもっと目立たせて、知ってもらえないか？
- ・ 移住者を増やすためには、まず内海との縁やゆかりが必要では？
- ・ もっと多くの人に移住してほしい一方で、きちんと地域に馴染める人に来てほしいというジレンマがある。

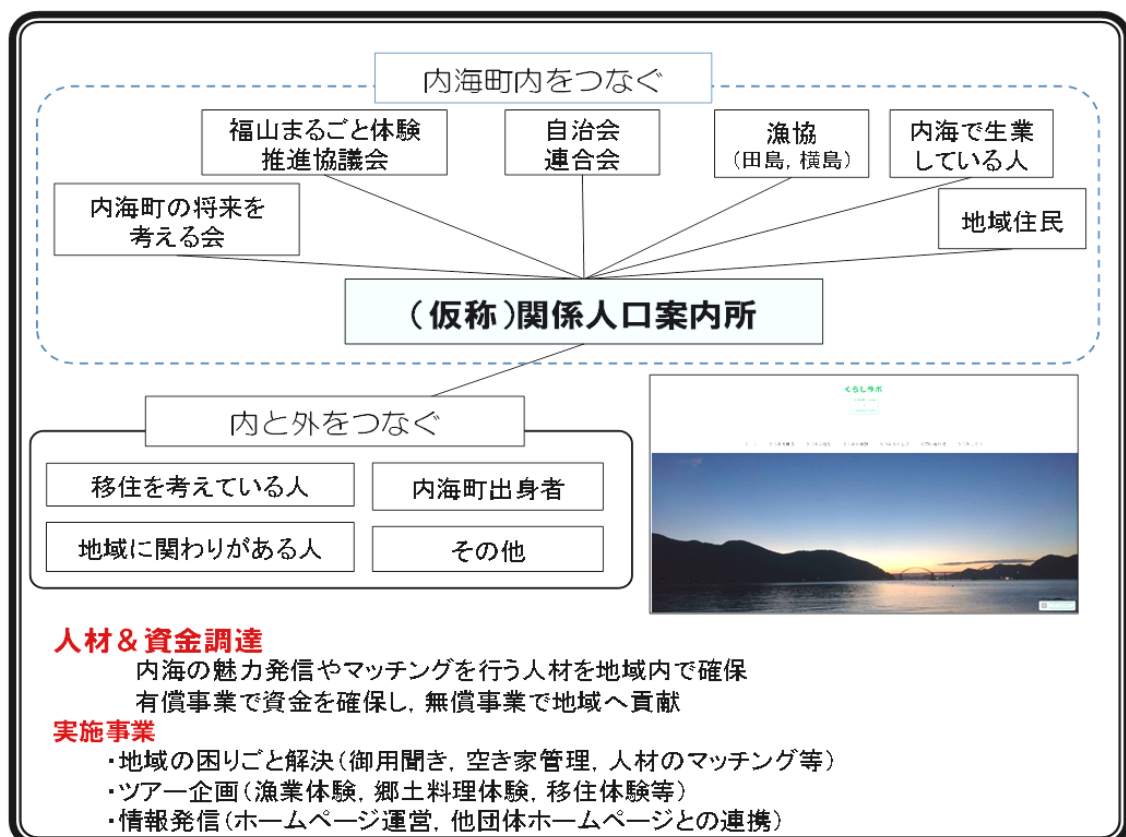
提案

(仮称) 関係人口案内所の設立

情報発信

ライフスタイル、地域の活動、特産物ブランド化ほか
地域のコーディネート

地域内外のつながり創出



人材&資金調達

内海の魅力発信やマッチングを行う人材を地域内で確保
有償事業で資金を確保し、無償事業で地域へ貢献

実施事業

- ・ 地域の困りごと解決(御用聞き、空き家管理、人材のマッチング等)
- ・ ツアー企画(漁業体験、郷土料理体験、移住体験等)
- ・ 情報発信(ホームページ運営、他団体ホームページとの連携)

提案発表 ⇒ 組織づくり ⇒ ホームページ立ち上げ

山野町

山野町の次世代の育成、活躍の場の創出

山野町フィールドワーク、
地域住民との意見交換会の実施



魅力	課題
・市中心部から30分程度で豊かな自然に出会うことができる。 ・地域の人々が子育てに寛容。 ・自然や農産物など、活用できる可能性を秘めている。	・現在まちづくりを担う60歳以上の世代と次世代(20代、30代、40代)とのまちづくりに対する意識の違い。 ・まちづくりの担い手が育っていない。

(山野町の活性化策)

1. まちづくりの中心を次世代に

- ・今の世代ができないことを支援
- ・次世代の育成
- ・新しい住民、関係者の増加

2. 山野のファンを増やす

- ・「知る→来る→リピート→住む」というステップを踏む
- ・山野にビジネスを生む

空き家の調査、活用

(目的)
定住人口の増加、地域の担い手増加

- (地域での調査活動)
- 地域の空き家の洗い出し
 - ・地域から空き家の場所を聞き取り、外観調査
 - ・オーナーからの聞き取り、内部調査

インターネット版社の設立

(目的)
地域で経済を回す仕組みを作る

- (地域での調査活動)
- 生産者への訪問
 - ・事業説明
(はちみつ、フォックスフェイス、野菜など)
 - 運営者の発掘
 - ・地域住民にインターネット版社の仕組みを説明。
 - ・地域の若い世代に運営に加わってもらうよう勧誘。

山野町の空き家紹介サイト 「ヤマノッティ」



提案の柱

- 空き家の「見える化」、情報発信
 - ・HPを使い、空き家の詳細情報を町外に発信
 - ・移住希望者とオーナーをつなぐ
- 空き家を貸すターゲット設定(ヤマノッティ憲章)
 - ・地域が「山野町に住んでほしい」と思う人の条件を明文化(移住希望者に対する不安の解消)
- 空き家を活用&宿泊
 - ・掃除、リノベーションなどのイベントを企画、宿泊
 - ・空き家及び地域に親しむことで、移住意欲を高める。

合同会社 「ヤマノミライ」



提案の柱

- インターネット版社の設立
 - ・クラウドファンディングによる資金調達
 - ・販売商品の発掘
 - ・地域の若い世代の参加
- 自走に向けたロードマップ
 - ・メンバー(外部人材、大学生)主体の運営でスタートし、地域住民主体の運営に移行させていく。

〔事例紹介③〕 離島振興「奄美プロジェクト」（鹿児島県大島郡瀬戸内町）

利活用できそうな空き家、空き店舗などを把握する「空きキャパシティ調査」を、鹿児島県大島郡瀬戸内町で行う。

町内の住環境の整備，改善が目的で古仁屋市街地を歩いて回り，建物の状況や使用の有無などを確認する。

調査は，同町と県大島支庁瀬戸内事務所が昨年度から実施している「チームせとうち・我が事・丸ごと・支え愛事業」の調査に協力するため，本学都市経営学部の根本修平講師とそのゼミ生9人が来島する。

学生は，町すこやか福祉センターで町の状況や調査方法などの説明を受けた後，2人ずつ9組に分かれて調査を開始。空き家などの窓や外壁の破損，庭の雑草，ごみの状況など，あらかじめ決められた調査項目を目視で確認し記録した。

調査を終えた学生からは，「思ったより建物がしっかり管理されていると感じた。町の必要としている施設として活用できたらいいと思う。」「判断に迷う建物もあったが，こんなにじっくりと空き家を見る機会がなかったのでいい勉強になった。手を加えることで使える建物もあると思う。」などの意見があり，加計呂麻島全集落を回り，2日間で計291軒を調査する。



②学習・教育の支援

地域学習の支援 (運営のサポート, 学びを活かした活動支援)	■放課後子ども教室, 土曜チャレンジ 週1回公民館などで行う活動をサポート ■ワクワク学び隊 夏休み, 春休みの地域学習イベントをサポート
高大連携事業 (高校と大学の連携事業) ・テーマごとの年間学習プログラム ・学生による事業支援	■福山市立福山高等学校 ①地域探究活動: テーマ「郊外団地のまちづくり」 ②グローバル人材育成事業 ③ビジネスプラン合同ワーク ■岡山県立笠岡高等学校 (1年生全員) 地域学: 笠岡市のまちづくり
中大連携事業 (中学と大学の連携事業) ・中学生の大学訪問 ・学生による事業支援	■福山市立鞆中学校の英語特別授業 英語による観光ボランティア活動を支援 ■海と山中学生サミット 島嶼部や山間部の小規模校が行う, 特徴的な活動の成果発表 (グループワーク, 学校間の交流を支援)
夏休み日本語チャレンジ教室 ・大学で教室を開催 ・学生による教育と研究	外国につながる子どもたちの学びを通して, 多文化共生のあり方, 学習支援の研究
ユネスコスクール支援 (小中高校のSDGsの学習を支援)	おもに福山市内の中学校の学習支援として, 大学での授業, 各学校への出張講義 (授業の運営, グループワークをサポート) ※ユネスコスクール支援大学間ネットワークに加盟

■地域学習の支援 (ワクワク学び隊)



■「SDGs 福山版」に向けたパネルディスカッションとワークショップを開催



〔事例紹介①〕

【高大連携事業】福山市立福山高等学校「若者が考える郊外団地のまちづくり」

2018高大連携事業

「幕山地域を考える研究」発表

 福山市立福山高等学校 ×  福山市立大学

高大連携事業とは・・・

高校と大学が連携して行う教育活動のことで、高大連携により、高校生の大学における学習に対する目的意識や将来に対する意識の向上を図ろうとするものです。

また、大学生にとっても「テクニカルスキル(事業遂行能力)」「ヒューマンスキル(対人関係能力)」「コンセプチュアルスキル(概念化能力)」を身につける貴重な機会でもあります。

福山市立福山高等学校と福山市立大学による高大連携事業は、2017年度に引き続き、2年目となります。

今年度のテーマは・・・

東部地域郊外団地のまちづくり～幕山台地区を事例に～

幕山台地区は1980年代に開発された住宅地(ニュータウン)であり、同世代の世帯が同時期に入居したことから、高齢化が一気に進行すると予想されていることを踏まえて、高齢化によって発生する課題を発見・整理し、対策を考えることに取り組んでいます。

これまでに、学区のまちづくり推進委員会や自治会の方々などのご協力をいただき、幕山台地区に関するレクチャーや現地視察、視察結果を踏まえたグループワークなどを行ってきており、その成果を発表します。



大学教員が少子高齢化社会における
新市街地(ニュータウン)の状況や課
題に関する講義を行いました



地域住民の方々に幕山台地区の概要
等をご紹介いただきました



現地視察でも地域住民の方々に説明
をいただきました



講義や現地視察を受けて感じたこと
をグループワークで出し合いました

2018高大連携事業・最終発表会

日時：2018年11月17日(土) 11:00～12:00

場所：福山市立大学(港町キャンパス)
研究棟1階 中講義室A

※ 発表会は大学祭の発表プログラムの
一環で実施



〔事例紹介②〕

【高大連携事業】岡山県立笠岡高等学校「ACT地域学」

岡山県立笠岡高等学校にて、1年生の地域探求学習「地域学」に、本学都市経営学部渡邊一成教授と、ゼミ生12人が参加しました。「地域学」の授業は、笠岡市にかかわる様々な問題について、現地を視察したうえで、探求課題を設定し、解決策を考えていくという内容で行われます。

今回の授業は、現地での視察を終え、本学の学生によるアドバイスを受けて、探求課題を設定するという内容でした。

テーマは、

- ①住んでみたいと思える笠岡を創ろう
- ②18歳選挙権
- ③医療や介護の現場で起きていること
- ④笠岡諸島の振興について
- ⑤住民自治力の向上について
- ⑥駅及び駅周辺の集客について
- ⑦耕作放棄地の解消

の7つあり、それぞれのテーマについて、4～6のグループごとに、異なる課題の設定を行いました。指導役となる学生たちは、積極的にグループと関わり、生徒たちがよりよい学習を行えるようにアドバイスをしていました。生徒からお礼の言葉をいただいた学生もあり、大学生との交流によって高校生の学びを深める取り組みとなりました。



(2) 公開講座

社会貢献として大学内での公開講座を開催するだけでなく、行政や企業、市民活動団体などと連携して、持続可能な地域の発展に貢献する人材育成の講座・セミナーを行います。

①公開講座：シリーズ「知の共創」

テーマ	開催日	参加者数（人）
広告から楽しむ，世の中の潮流	2018/5/12	71
中国の道德教育の歴史と現在	2018/7/17	78
土は世界を救えるか？	2018/10/20	32
文字と生きる 知られざる文字の魅力を紐解く！	2018/11/17	26
形状記憶合金のしくみと応用	2018/12/15	76

②特別講演会

テーマ	開催日	参加者数（人）
びんご圏域 6 大学連携講座（広島県府中市で開催）	2018/5/26	50
国際幼児教育学会特別講演 ～子どもの最善の利益とは～	2018/9/15	280
水のすがたとゆくえを追いかけて	2019/3/16	102

③連携講座・ワークショップ

テーマ	開催日	参加者数（人）
【ワークショップ】抽象画にチャレンジ！ 担当：福山市立大学教育学部 渋谷 清 教授	2018/7/16	30
【高大連携事業】郊外団地のまちづくり提案 担当：福山市立大学都市経営学部 渡邊 一成 教授	2018/11/17	73
キャリアデザイン×ライフデザイン講座 担当：福山市立大学都市経営学部 渡邊 一成 教授	2018/11/28	35
【地域連携セミナー】学生による活動報告 中心市街地の活性化&関係人口創出事業	2019/1/30	72
外国につながる青少年のドキュメンタリー上映と意見交換 担当：福山市立大学教育学部 劉 郷英 教授	2019/3/3	30

④国際交流

テーマ	開催日	参加者数（人）
災害に強いまちづくりのための多文化共生シンポジウム	2019/2/11	95

⑤ふくやまサイエンスフェスティバル

テーマ	開催日	参加者数（人）
2018 ふくやまサイエンスフェスティバル	2018/9/29	1,440

知の共創① 広告から楽しむ、世の中の潮流

講師： 大久保 祐介（株式会社電通 チーフマーケティング・プランナー）

日時： 2018 年（平成 30 年）5 月 12 日（土） 14:00～15:30

場所： 本学 大講義室



《世の中の潮流》

誰もが情報を発信できる時代。個人の投稿がネガティブに拡散して炎上することあれば、ポジティブに拡散して夢が実現することもある。そのような世の中をどうしたら楽しめるのか。本講座では、株式会社電通のチーフマーケティング・プランナーを務める大久保祐介氏を招聘し、現代社会における広告の役割についてお話しいただいた。講座は、「広告制作の考え方」、「昔の広告、今の広告」、「最先端の広告」の3つのパートから成り、広告制作・配信の基本的な考え方と情報発信の際のヒントを探り、それを活用すると現在の世の中でどのように可能性が広がっていくのか、具体的な事例を交えることで、受講者の皆様がイメージしやすい講義であった。また、個人のチャンスを広げるために、広告制作・配信の考え方を知り、活用する有益な内容であった。以下ではオーディエンスの注目が集まった3つの論点を中心に報告する。

1. 「広告制作の考え方」について

広告を制作する際には、ターゲットとなる人を設定して、次の観点から分析・考察を行う。何を伝えるべきなのか、どのように伝えるか、どの場所・メディアで伝えるか、どのタイミングで伝えるか。そうすることで、様々な情報が飛び交う世の中でも、効果的に伝わる。人や世の中を洞察した上で広告が制作されることから、広告は世の中を反映すると言われる。各観点での考え方のイメージが湧くように、具体的な広告事例を用いて説明がなされていた。

2. 「昔の広告、今の広告」について

昔の広告と今の広告を見比べながら、ファッション、テクノロジー、価値観などの観点から、世の中がどのように変化しているかを考察した。世の中を大きく変化した要因の一つが、インターネットの普及である。テレビ・新聞・雑誌・ラジオといったマスメディアに接触する時間が減る一方で、スマートフォンやパソコンなどのインターネットに接続するメディアの接触時間が増加していることは統計を見れば明らかである。これにより各人が接する情報が大きく異なることによって、価値観の多様化が進展している。また、人が処理できる情報量には限界がある中で、世の中に流通する情報量が爆発的に増え、ほとんどの情報は認識すらされていない。そのような現代では、情報の受け手の視点で、広告を制作・配信することが、今まで以上に重要になってきている。

3. 「最先端の広告」について

最新の広告現場を、データという観点から紹介した。朝起きてから夜寝るまで、スマートフォンがあれば不自由がない世の中になりつつある中で、インターネットに繋がるスマートフォンからは、様々なデータを取得できる。中でも、広告の効果を検証するために、購買データと位置情報データの活用が注目されている。取得した大量のデータを活用して、より効果的な広告を制作するために、統計的手法やAI技術が注目されている。また個人として活用可能なオープンデータがあふれており、情報発信の際のヒントを探った。

知の共創② 中国の道德教育の歴史と現在

講師： 嚴 平（中国人民大学教育学院 副教授）

日時： 2018 年（平成 30 年）7 月 17 日（火） 10：40～12：10

場所： 本学 中講義室 B



この講座の背景

近年、日本への外国人旅行者が急激に増加していることや外国人労働者をさらに多く受け入れる基盤が作られつつあることは、日本国内に閉じられていた道德及び道德教育をオープンな形で議論する必要があることを意味する。また、新学習指導要領のスタートに伴い、学校教育における道德は「特別の教科」として理論的にも実践的に新しい局面を迎えつつある。このような状況を踏まえ、東アジアの西洋教育受容史を専門とする嚴平氏を迎えて、道德教育を中心にした中国の教育の歴史と現在を概説してもらった。

中国の道德教育の歴史

中国の思想基盤を支える儒教を紐解く形で嚴氏は、中国の道德思想の歴史を論じた。その際、嚴氏の専門である日本の近世～近代の教育も並べて、比較の形でわかりやすく説明をした。その道德思想は、伝統的な「君臣、父子、夫婦、兄弟、友人の交」という五倫の人間関係に集約される。だが、今日につながる問題として、社会における他者との人間関係についての関係性は軽視されることも嚴氏は指摘している。

また、19 世紀後半の中国では西洋の産業技術と立憲君主制を目指す運動が行われていた。それらの革新は失敗したものの、教育改革の機運が高まり、中国の学制では日本をモデルにし、儒教的道德と忠君愛国精神の育成が図られたという。共和制の中華民国の成立後、初代教育総長の蔡元培は道德教育を、公民道德としてフランス革命と関連づけていたことも嚴氏は論じていた。その後、日中戦争の中、道德教育は政権の政治的主張に傾いた時期が一時あったが、リベラル教育者たちの反発により、共和国の理念と孫文が提唱した三民主義を中心とした公民教育が道德教育の中心に据えられた。

中国の道德教育の現在

第二次世界大戦後の中国では、社会主義リアリズム・集団主義の教育の中で、道德教育は別格の位置で強調されてきたという。というのも、中国指導層の考える「社会主義」の「思想建設」「文化建設」という目標は、思想意識の改造だけではなく、人の情操、意志、美意識の発達と改造までも対象としようとするものであったからである。だが、民衆の側からすると、そのような教育は、社会統制としての教育に限られる側面が強く、その側面が突出することに親近感を示さないのも無理はない。

中国が経済的に大国化する近年の時代の流れの中で、道德教育は今、国民の資質形成と市民性の育成という二つの課題を抱えている。教科の周辺に追いやられているというのが現状であると嚴氏はこれまでの道德教育をめぐる時代の推移を論じた。今後の課題として、德育教育における実践の重視や、教科書の全国統一、道德教科の再開などがあるという。

聴講者からは、説明を深めるための質問が出され、嚴氏は丁寧に答えていた。また、本学学生の聴講も見られた。日本の道德教育の変革を肌で感じる学生にとって、他国のその歴史と現状を聞く機会は貴重なものであっただろう。このような国際的な公開講座は、市民や学生にとってなかなか刺激的な機会であったと考える。

知の共創③ 土は世界を救えるか？

講師： 荒木 茂（京都大学 名誉教授）

日時： 2018 年（平成 30 年）10 月 20 日（土） 14：00～15：30

場所： 本学 大講義室



（講演要旨）

熱帯に分布する赤色強風化土壌の研究を背景に、講演者は 1986 年より 30 年間、アフリカにおける在来農業（焼畑）の生態に関するフィールド研究を継続してきました。地球温暖化対策が強く求められている現在、アフリカの森林破壊に由来する二酸化炭素の放出は、先進国を含めた全放出量のおよそ 10%といわれています。この意味でアフリカの焼畑は環境破壊の元凶のような世論が形成されていますが、現地の実情はより複雑なものがあります。

国際農業機関（FAO）の統計によると、アフリカ大陸の最近の 20 年間における森林減少割合は年間約 1%と評価され、20 年間で日本の国土面積の約 2 倍の森林が失われている計算になりますが、耕地面積がその分増大しているわけではありません。FAO によると、高さが 5m 以上の樹木が面積の 10%以上占める土地が「森林」と定義されていて、焼畑休閑地のように低い灌木で覆われた土地は森林から除外されています。焼畑休閑地は現在もグレーゾーンとして土地利用区分としては認定されておらず、これらをどのように評価し、将来的利用に備えていくかが鍵となっています。

2050 年に世界の人口は、95 億から 100 億人になると FAO の統計は予測しており、そのうちサハラ以南のアフリカの人口は現在の 2 倍の 20 億人になります。人口増加に応じた食料生産、農地の確保、環境保全をどのように保証していくかはアフリカのみならず、世界の課題となっています。温帯地域の先進工業地域がたどった環境負荷増大への道はアフリカ地域の発展モデルに適用されないとすれば、森林保全、生物多様性の保全には全地球環境保全の見地から、国際的な戦略をもった取り組みが必要とされています。世界的にみると穀物生産は、1960 年を基準として 2010 年には 3 倍に達したのに対し、人口増加は 2 倍にとどまっています。この傾向にかげりはみられないので、人類が食料危機に陥ることはないと思われそうですが、問題は地域格差です。第 2 次大戦後、アジア諸国では緑の革命（改良品種と、化学肥料、灌漑設備の組み合わせによる穀物の増産）を達成し、土地生産性を向上させましたが、アフリカ諸国では、化学肥料の使用はアジアの 20 分の 1 にとどまり、人口増加に見合った食料を生産していません。不足分は欧米の小麦、トウモロコシ、アジアのコメの輸入に頼らざるを得なくなっています。

アフリカ農民は、このような状況にどのように対処すべきでしょうか。講演者らはカメルーンにおいて、現在栽培されているキャッサバ焼畑システムの栽培法に、病虫害に抵抗性の強いキャッサバの改良品種の導入を試み、作業工程の一部を集約化することによって土地生産性を高め、結果として森林面積の拡大を阻止していく計画を 5 年間にわたって実施してきました。それはキャッサバの一連の加工プロセスを村の簡易加工施設で行い、新品種の導入によって 3 倍に増大したキャッサバ塊根の収穫を共同労働によって、労働生産性を高めていく試みでした。今後は、近隣の都市商人との流通システムの構築が計画されています。

森林と生物多様性の保全は、国際世論の関心を集めていますが、サバンナ地帯では農業セクターが大規模農業開発を推進している地域もあります。世帯当たりの耕地面積が約 1 ha とされるアフリカ小農が自活できる社会経済環境を整備していくことが、アフリカの自然、土壌を救う唯一の道と考えます。

知の共創④ 文字と生きる 知られざる文字の魅力を紐解く！

講師： 本田 蒼風 (MOJIKARA 研究所 所長 書家／アーティスト)

日時： 2018 年 (平成 30 年) 11 月 17 日 (土) 14:00～15:30

場所： 本学 書道教室



本田氏は社会との接点を構築するための表現手段として2歳から始めた「書道」を表現の中心に据え、筆文字デザインやパフォーマンス公演、アート作品を発表している。この講演では、ご自身が主宰されている MOJIKARA 研究所で実践している“社会の様々な問題を、「書」や「文字」を軸とした参加型アート体験を通して解決の糸口を提案する”という活動の紹介も兼ねて、当日の受講者全員にアートワークを体験してもらう貴重な機会になった。

(講演要旨)

1) 主宰している MOJIKARA 研究所の活動の紹介

地場文字を作って自分たちの暮らす土地の魅力を再発見《里想 (りそう) の樹プロジェクト》

各地で「自分たちの街づくり」を目的とした活動が展開される中、その土地を自分の感覚でとらえ発信することは重要なポイントであり、その方法として MOJIKARA 研究所が提案してきたのは「その地域限定で使用可能な「文字 (地場文字*1)」を創り出し、その文字を通して情報発信をする方法」という方法である。つまり既存にない文字を作ることが「文字を解明＝その土地のことを知るきっかけ」になると考えている。

*1 地場文字とは、本田氏の造語であり「その土地の人々の暮らす姿や景色から発想され、それを映し出す記号として生み出される地域限定で使用可能な文字」のこと。

2) 本講演でのワークショップ

来るべき「ダイバーシティ」を体感するアートワークショップ《confluence 合流地点》

多様な価値観を街づくりに活かすという発想「ダイバーシティ」という発想に基づき、様々な価値観がぶつかり合い、折り合いをつけ、共存するときに生ずる「パワーバランス」や、そこから生み出される新しい景色や世界を、アート作品共同制作を通して感じていただきたい。

まず本田氏が大きい紙面に「異和」の文字を書いた。

「異なる価値観、異なる視点を持つ者同士が折り合う地点を見つけ、新しい「和」を創り出すこと」という意味を込めている。

本田氏が書き上げた「異和」の作品の墨だまりを、いかに紙面上一杯に広げるか…新たな線を増やすか…。

その線の持つ意味は「新たな価値観の広がり」「新たな景色」。受講生が紙面を各自が自分の感覚で思うように傾けることで「墨が垂れ」新たな線が生み出される。線が描く景色はその紙面を囲んでいる人同士がそれぞれの判断で動き、合流地点を見つけようとした軌跡である。

それぞれ個人にとっての「善 (必要性)」と人間では制御不能な「引力」という力が織りなす新たな線。それぞれの最善をめざして動き、それによって描かれた放射線状の線たちは、自分以外の価値観と関わることが生み出す可能性の広がりを伝えている。文字から芽吹き、蔦のように絡まりながらも広がっていく景色に美しさと多様な価値観が共存し活かしあう未来に期待を込めて…。



知の共創⑤ 形状記憶合金のしくみと応用

講師：掛下 知行（福井工業大学 学長・大阪大学 名誉教授）

日時：2018年(平成30年)12月15日(土) 14:00～15:30

場所：本学 大講義室



（講演要旨）

形状記憶効果という言葉をごどこかで聞いたことがあると思います。この効果は、形状記憶合金に弾性変形以上の変形を与えた後、ある一定の温度以上に加熱すると変形前の形状に完全に回復する現象で、普通の材料はこのようなことは起きません。

この効果の基本は、水の3態（氷、水、気体）として知られている相変態にあります。相変態というのは、例えば、固体の氷から液体の水へと状態が変化することです。この相変態が、形状記憶合金では固体の中で起きるので、具体的に述べると、形状記憶合金の代表であるTiとNiから構成されるTi-Ni合金の場合、高温では体心立方格子（正確にはB2）ですが、温度が低くなるとある温度で面心立方格子に近い格子（正確にはB19'）になります。この温度を、変態温度と呼んでいます（氷と水の場合は0℃です）。この合金の変態温度は室温以上なので、室温ですでに面心立方格子に近い格子（B19'）になっています。この変態の特徴ですが、変態に伴う格子変化をもたらす原子の動きはほんのわずかです。その動きを、図1を用いて説明します。

低温でみられる面心立方格子（原子は角と面心の位置にある）を2つ合わせたものですが、太棒で示したようにこの中にはすでに高温で見られる体心立方格子（原子は角と体心の位置にある）に近い格子が見られます。体心立方格子になるためには、3軸の格子定数が等しくなるように伸縮すると良いことになりますが、その値は20%程度です。したがってこの変態は、原子がわずかに移動することで起きることになります。専門的には無拡散変態と呼んでいます。この変態の特徴を述べましたので、図2を用いて形状記憶効果のメカニズムを述べます。温度を下げると、高温相（B2）が相変態を起こして低温相のマルテンサイト相（B19'）になります。このマルテンサイト相は、図で示したように、A領域とB領域から構成されております。この領域は互いに鏡に映した関係（双晶関係）にあるもので、各々の領域を結晶学的ドメインと呼んでいます。この結晶学的ドメインが導入されるのは、相変態に伴う外部変形の仕事を最小にするためです。この状態に、図2で示した応力を負荷（せん断応力）すると、その応力を最も緩和することのできるドメイン（この場合はA領域）の界面移動による成長が起きることになります。すなわち、B領域のドメインがA領域のドメインに変換されることになり、この変換に伴い変形が起きることになります。この変形した合金を高温にしますと、低温相のマルテンサイト相（B19'）は高温相の母相（B2）に相変態を起こして、元の形状に戻るようになります。以上が形状記憶効果のメカニズムです。その応用は、幅広く、例えば、カテーテル、ステントの医療材料にも使われています。

図1 ベインの格子対応関係

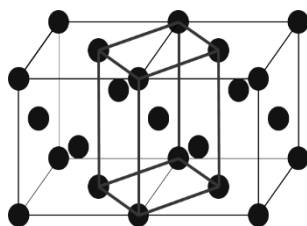
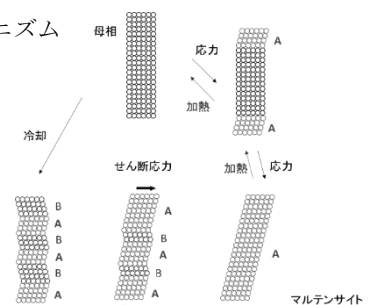


図2 形状記憶効果のメカニズム



さよなら・公開講座 水のすがたとゆくえを追いかけて

講師：平松 和彦（福山市立大学教育学部 教授）

日時：2019 年（平成 31 年）3 月 16 日（土） 14：00～15：30

場所：本学 大講義室



1 周氷河地形との出会い

周氷河地形とは私が最初に赴任したのは北海道北部の小さな町、士別市であった。氷河時代に地表が寒気に触れることにより、地面が凍結と融解を繰り返すことに起因するのが周氷河地形である。雪が積もればこれが掛布団の役割を果たすので、地表は凍結しないが、氷点下の寒気が直接当たれば凍土が生まれる。水分を含んでいる地表は凍結融解を繰り返すことによって脆くなり、下方へと移動していく。この凍結融解の繰り返しによる物理的な風化作用によって生まれた周氷河性緩斜面が北海道北部には広がっていたのである。北海道北部や東部に見られるなどらかな緩斜面が織りなす風景に魅力を感じて、その成り立ちに興味を持ち、しだいに地形学へと興味の関心が移っていった。

広大なフィールドの真ん中に自宅があるという感覚で、休日は周辺の地質や地形を見て回る生活が始まった。士別市立博物館の特別学芸員として原稿を発表する機会にも恵まれて、30 代の頃は時間を捻出してフィールドを歩くことを心掛けた。地形調査をとおしてある丘陵の頂上で極寒期もほとんど無積雪の地点で冬期間に地面の凍結深度の測定を開始し、積雪の深さとの関係を研究するようになった。また天塩川の流域の自然環境調査を開始した。旭川市に異動した 1990 年以後は寒冷環境における自然現象を再現する実験に取り組むことになった。「寒さの教材化」を今まで以上に意識するようになったのはこの頃である。

2 水の三態変化を可視化する雪氷実験

我々にとって水は身近な存在である一方、きわめて特殊な物質である。水が氷に変わるときに体積が 9 % 膨張し密度は大きくなるが、このような物質はほかに数えるほどしか存在しない。水分子は水素原子 2 個と酸素原子 1 個が水素結合という組み方をしており、氷では六角柱を基本とした結晶構造をもつ。この結晶構造は固体なのに水よりも密度が小さく、融けて水になってもこの構造は残っているが温度が高くなるにつれてその割合は低くなる。つまり密度が次第に大きくなる。一方で水も他の物質と同様に高温になるほど分子間の距離が遠くなり、密度が小さくなる。水が最大密度になる温度が 4℃である原因はこの 2 つのことが原因になっている。

おかげで池の水が表面から凍っても底には温かい水が横たわることになる。水分子の構造がひいては地球環境の維持に大きな役割を果たしているのである。

水が凍結する際の体積膨張が原因で、岩石は破碎され、地表の土壌も乱される。周氷河地形の形成過程には水の働きが不可欠である。水の三態変化は理科でもしばしば取り上げられるテーマだが、三態変化の様子を直に観察できる実験に取り組むようになった。

高校理数科の課題学習のネタを考えなければならない状態も幸いした。その過程で生まれた人工的に雪結晶を作る実験が各地で実施されるようになり、出前授業では九州や山陰へと出向くことになった。雪結晶は「水蒸気→氷」の変化であるが、「水→氷」の変化を可視化する過冷却水の凍結実験も授業の他、科学館などで演示するようになっていった。雪氷に関する実験は、そもそも北海道の地域性に着目して始めたのだが、「水の変身」の可視化という点では、地球上のどこでも通用する実験といえる。

3 実験の新たな展開

簡単で再現性の高い実験を行うためには、身近な素材を使って行うことが肝要である。学生には実験の面白さを体感してもらい、自ら取り組むきっかけにして欲しいと考えて、大学の講義では可能な限り実験の機会を用意し楽屋裏をそのまま見せた。小学校現場との距離も以前より近くなり、新しい実験を考えること自体、楽しい時間だった。簡単に実験や科学遊びの背景には普遍的な法則が存在し、そこから物理法則を理解し、本物に触れて肉眼で観察する実験や実習は、デジタル機器が発達した現在だからこそ大切にしたい。



講演の様子（講演後には参加者と実験を行う。）



平松先生は2018年度で退職されるため、本学の教員として最後の講演となりました。

多文化共生のまちづくり：防災、外国人労働、ネットワークづくりの視点から
～防災×多文化共生のまちづくり～
災害に強いまちづくりのための多文化共生シンポジウム

日時： 2019 年 2 月 11 日(月・祝) 13:00～17:00

場所： 本学 大講義室，食堂

後援： 中国新聞備後本社 エフエムふくやま

福山市には、約 9,400 人の外国籍住民がいます（2019 年 1 月末現在）。これは 5 年前と比べて 1.5 倍の人数です。

2019 年 4 月にいわゆる「入管法」が改正され、今後外国籍住民が増加していくと考えられる一方で、2018 年 7 月の西日本豪雨災害においては福山市内で被災された外国籍住民の方が数多くいました。そのような状況の中で、「防災」というキーワードで多文化共生について考えていく必要性が高まっています。

2019 年 2 月 11 日に、「防災×多文化共生のまちづくり 災害に強いまちづくりのための多文化共生シンポジウム」が 2 部構成で開催されました。

第 1 部では 4 つの発表が行われました。まず、福山市人権・生涯学習課及び市民相談課の方からは「福山市の多文化共生の現状について」と題して発表をしていただき、次に、本学都市経営学部の上別府隆男教授による「福山市における外国人労働者の実態、役割と課題に関する調査結果」の報告が行われました。その後、多文化共生のまちづくりのために活動している宮野宏子さんと客本牧子さんから「西日本豪雨災害時の聞き取り調査」の報告として、西日本豪雨災害後に行われた外国籍住民に対する聞き取り調査でみてきたことについて発表され、最後に、都市経営学部の牧田幸文准教授より「ゆるやかなネットワークづくりのロールモデル 京都の取り組み事例から」と題した発表が行われました。

第 2 部では、「防災と多文化共生」をキーワードに、自分たちに何ができるのかについてグループごとに話し合いました。大学生や市職員、市議会議員、教育・保育関係者など様々な立場の参加者が意見交換を行うことで、新しいつながりが見えてきました。

参加者からは、大学が課題解決に向けて牽引的な役割を果たしていることに対して期待の声が寄せられました。教育研究交流センターでは、シンポジウム実行委員会とともに、今後の方向性について新たな展開を検討しています。



ふくやまサイエンスフェスティバル

日時： 2018 年（平成 30 年）9 月 29 日（土） 10：00～15：00

場所： 本学 港町キャンパス

主催： ふくやまサイエンスフェスティバル実行委員会
（事務局 福山市立大学教育研究交流センター）

協賛： 株式会社エフピコ 株式会社ハローズ 福山ガス株式会社 ホーコス株式会社
株式会社新興出版啓林館 NPO 法人ひとまちスタジオ

協力： 広島大学附属福山中・高等学校天文地学クラブ 福山市立小学校教員
福山市立福山中・高等学校自然科学部 福山都市圏交通円滑化総合計画推進委員会
福山市企画政策課

6 回目を迎えるサイエンスフェスティバルは、参加型の実験ブースと協賛企業によるデモンストレーション及び屋内でのサイエンスショーという 3 本立てで構成された。今年度のフェスティバルは台風が接近している天候を考慮し、6 回目で初めての「屋内」での実施となった。

実験ブースは、①葉っぱのガイコツ、②ストロー笛をつくろう、③スライムで遊ぼう、④割れない?!シャボン玉 & おもしろ展示、⑤音を見てみよう、⑥ミニ実験パーク、⑦砂を顕微鏡で観察しよう、⑧備後のCO₂削減『ベスト運動』、⑨富士山と「雲の伯爵」阿部正直、が実施された。

地元企業企画としてはホーコス株式会社による「精密機械のデモンストレーション」、福山ガス株式会社と株式会社ハローズの 2 社共同による「低温貯蔵のイモをくらべよう」、株式会社エフピコによる「プラ板でお気に入りのキーホルダーを作ろう」、株式会社新興出版啓林館による「木の葉の化石を掘り出そう」、NPO 法人ひとまちスタジオによる「プログラミング・アプリ創作」の 5 展示が披露された。

サイエンスショーのステージでは、古田綾香さん（バンドー神戸青少年科学館学芸員）による「なぜだろう？空気と水のふしぎな実験」と中川真さん（福井県児童科学館学芸員）による「面白おもちゃ大集合～手作りおもちゃのひみつ～」がそれぞれ、午前午後 1 回ずつ、合計 4 回行われ、好評を博した。

サイエンスショーの間には本学吹奏楽部による演奏が披露されて、子ども達がうれしそうに耳を傾けていた。大学の食堂で実施されたステージは、以下のスケジュールで実施された。

10：00 開会式

10：30 サイエンスショー「なぜだろう？空気と水のふしぎな実験」

11：30 サイエンスショー「面白おもちゃ大集合～手作りおもちゃのひみつ～」

12：10 吹奏楽部演奏

13：00 サイエンスショー「なぜだろう？空気と水のふしぎな実験」

14：00 サイエンスショー「面白おもちゃ大集合～手作りおもちゃのひみつ～」

お土産グッズを受け取ることができるブースでは、順番待ちの列ができて若干滞留する状態が生じることはあったが、大きな混雑もなく子ども達は楽しんでいるようであった。



サイエンスショー

「なぜだろう？空気と水のふしぎな実験」



サイエンスショー

「面白おもちゃ大集合～手作りおもちゃのひみつ～」



プラ板でお気に入りのキーホルダーを作ろう



精密機械のデモンストレーション



低温貯蔵のイモをくらべよう



木の葉の化石を掘り出そう



プログラミング・アプリ創作



富士山と「雲の伯爵」阿部正直



音を見てみよう



割れない?! シャボン玉&おもしろ展示



葉っぱのガイコツ



ストロー笛をつくろう



備後のCO₂削減『ベスト運動』



スライムで遊ぼう



ミニ実験パーク



砂を顕微鏡で観察しよう

(3) 連携事業

①産学官連携事業

地元企業	鉄鋼スラグによる水質浄化に関する調査・研究
地元企業	アクリル端材の再利用による壁面・空間装飾技術とアクリル加工技術の開発
地元企業	繊維産地継承プロジェクト／啓発活動の支援、共同研究など
地元宅地開発会社	企業と学生のコラボで、不動産ビジネスの新展開を実践的に研究 (伊勢丘スターハウスリノベーション研究会)
福山市・地元企業	福山市水道施設におけるエネルギー最適化ソリューションに関する研究
福山市・地元企業等	福山市総合戦略推進会議人口減少対策 地元企業体験プログラム、学生の意識調査、分析など調査・研究
福山市・地元企業	先端技術によるまちづくり官民協議会（まるごと実験都市ふくやま）
福山市・地元企業等	福山駅前の再生デザイン会議／学生と地域住民が企画・実施する公園を活用したイベント等
福山市・地域団体等	関係人口創出事業／事業を通して得たノウハウを大学に蓄積し関係人口と地域をつなぐプラットフォームを確立
福山市・企業等	官民協働留学支援事業（トビタテ！留学JAPAN）
福山市・地域団体等	災害に強いまちづくり／防災リーダーの育成
福山市・企業	産学官連携調査研究事業／ソフトバンクとの連携事業など
福山市・地域団体等	学校再編地域の地域活性化の施策・事業を構築について調査・研究
福山市・地域団体等	持続可能な地域コミュニティのあり方に関する有識者会議
福山市・教育委員会	保幼小連携事業、福山100NEN教育の推進など、就学前児童の小学校への接続を支援（研修会などの開催）
福山市	備後圏域産業連関表や備後圏域経済波及効果算出システム等ツールを活用した政策立案の支援
福山市	福山市産業における多文化共生と国際交流の促進／福山市で働くことを希望する外国人の増加に向けた施策の検討、多文化共生のまちづくりの検討等
福山市	福山市の持続可能な発展に向けたまちづくり関連情報の体系化 WEBGISを活用した研修の実施及び情報収集
広島県・北広島町	道の駅舞ロードIC千代田トイレ改修プロジェクト
鹿児島県さつま町	旧白男川小学校廃校リノベーション「きららの楽校」プロジェクト

②社会人セミナー

事業名	内容等
モビリティマネジメント講習	新しい交通政策の市民への理解を広げる。
G I S 研修	G I S を活用した防災等の都市計画に関する研修
保幼小連携合同研究会	就学前から小学校への育ちと学びについて共通理解を深め、生活と学びの連続面を拡充する可能性と方策を探る。
エリアマネジメント講習	福山商工会議所と連携して、中心市街地の事業者を対象に持続可能な地域づくりを考える。
水道事業健全経営化研修会	備後圏域内の各市町を対象にした研修会
ネウボラ相談員研修	福山版ネウボラの推進を支援（相談員の養成と研修）

※キャリアデザイン×ライフデザイン講座，グローバル人材育成事業など，学生＋社会人の講座も開催



■ G I S 研修



■保幼小連携合同研究会



■グローバル人材育成事業（海外研修：タイ）



■キャリアデザイン×ライフデザイン講座

〔事例紹介①〕 道の駅舞ロード IC 千代田トイレ改修プロジェクト

完成前のトイレの壁にカッティングシートを貼ろう！！

トイレブースの内側の壁にパターン化されたシートを貼るワークショップです。DIY未経験でも参加しやすい内容をご用意しております！





道の駅「舞ロード IC 千代田」トイレ改修プロジェクト

DIY ワークショップ

2019年3月23日(土) 1部 10:00-12:00 / 2部 13:00-15:00
 3月24日(日) 3部 10:00-12:00 / 4部 13:00-15:00

□場 所：道の駅 舞ロード IC 千代田トイレ

□定 員：各回10～20名
※一日通しでの参加も可能です

□対 象：小学生～大人
※小学生は保護者同伴をお願いすることがあります
※町内在住者または町内勤労者

□準 備：汚れてもいい服装

□問い合わせ・申し込み 締め切り：3月18日(月)

北広島町商工観光課
 TEL:050-5812-8080(平日8:30～17:00)
 E-mail: syoukou@town.kitahiroshima.lg.jp

電話、メール、来所にて必要事項(氏名、年齢、電話番号、メールアドレス)をお伝えください。

参加費無料



地域の道の駅「舞ロード IC 千代田」の**トイレ**を一緒に気持ちの良いものにしませんか？

【主催】広島県西部建設事務所安芸太田支所 【共催】北広島町 【企画・制作】福山市立大学根本研究室

1/12(土)
実施

「道の駅舞ロードIC千代田」のトイレが、この春、リニューアルします。

第2回ワークショップを開催しました

～トイレ内の装飾デザインに活用されます～



・地域の方々に参加していただき行うワークショップ。前回と同様、福山市立大学の学生さんたちが進行役となり、千代田高校の生徒さんたちをはじめ、多くの方々に参加いただきました。

・今回は、前回撮った写真から、印象的な形や言葉などのエッセンスを抜き出し、連想される様々なイメージを描き出すことに取り組みました。

・今回のワークショップの成果を使って、福山市立大学においてトイレ内の装飾デザインを決定し、次回開催するDIYワークショップ(今年度3月末予定)で、実際にトイレ内の装飾をお手伝いさせていただきます！！

第2回ワークショップの様子

1 気になる写真を選ぼう

各自、気になる写真を数枚、選びました



2 写真からエッセンスを抜き出そう

想像力を働かせながら、感じられる形や言葉を写真に書き加えました



みんな真剣に取り組みました



デザインに活用してもらえますかな



興味のある方は、次回開催するDIYワークショップに、是非、ご参加ください。
 下記の連絡先にお問い合わせ・申し込みをお願いします。
 北広島町商工観光課 TEL:050-5812-8080(平日8:30～17:00)
 E-mail:syoukou@town.kitahiroshima.lg.jp

【主催】広島県西部建設事務所安芸太田支所 【共催】北広島町 【企画・制作】福山市立大学根本研究室

〔事例紹介②〕 旧白男川小学校廃校リノベーション「きららの楽校」プロジェクト

鹿児島県さつま町では 2016 年に閉校した白男川小学校を改修し、地域の拠点施設及び簡易宿泊所として 2019 年のオープンをめざして準備を進めています。

その中で、地域住民の方々や福山市立大学の講師と学生が中心となって、改修後に使用するテーブルの作成や学校の机・椅子等の修繕の一部を DIY で実施する予定です。



白男川小学校NEWS

H30.8発行

みんなのチカラで白男川小学校を再生しよう！

平成28年3月に閉校し、同年5月から町、第一工業大学、地域の3者による話し合い活動が持たれ、「小学校を地域で有効に活用しよう」という構想がまとめられました。その基本構想をもとに施設改修内容や運営方針に関して跡地活用プロジェクト事務局と町で、検討を重ねてまいりました。

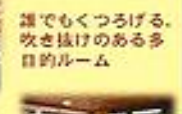
「地域のよりどころ」と「みんなが帰ってこれる宿泊施設」
として生まれ変わろうとしています。

「地域のよりどころ」

キッズたちが遊べて学べるブックマウンテン



誰でもくつろげる、吹き抜けのある多目的ルーム



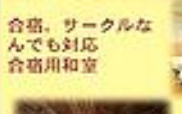
おいしいご飯が提供される、カフェ、白男川キッチン



2段ベッドのブリリア空間 ベッドミトリ



合宿、サークルなんでも対応 合宿用和室



長期から短期まで滞在可能 長期、ツインルーム



白男川小学校改修

平成31年4月OPEN予定

～みなさんの力をお貸しください。人、物資、技術なんでもOK～

・自分たちの手で改修を！DIYボランティア募集 **(9/8～9/22実施)** ◎白男川小学校
―薩摩中央高校、川内商工高校、福山市立大学の学生と一緒に簡単な日増大工や塗装など

さつま町商工観光PR課
白男川小学校跡地活用プロジェクト事務局
【問い合わせ】shirahimegawa136@gmail.com
090-1924-9398 (事務局次長 久徳)

宿泊イベント
「ワンディビレッジin白男川」
H30.8の様子はこちら⇒
<https://youtu.be/7P08N1Xn12Y>



28

③大学間連携事業（事務局：福山市立大学）

びんご圏域連携グローバル人材育成事業

尾道市立大学・福山大学・福山平成大学との4大学による講座・海外研修の開催

びんご圏域6大学連携講座

備後圏域内6大学による各大学の講座情報を共同発信

備後圏域発達支援研究会：発達障害の課題解決，シンクタンク機能

県立広島大学・福山大学との3大学による調査・研究活動，講演会等の開催

びんご圏域連携グローバル人材育成事業

参考資料1

事業の目的

地元企業の協力のもと，備後地域における4大学が連携し，グローバル人材育成をねらいとした実践的講座を行うもの。
本講座で習得した国際経営理論や知識と，海外研修との相乗効果によって，真に国際ビジネスで活躍できる人材を育成し，備後圏域に供給することを目的とする。

実施主体

グローバル人材育成事業実施協議会
(2016年(平成28年)3月18日設置)
構 成：尾道市立大学，福山大学，福山平成大学，福山市立大学
事務局：福山市立大学事務局総務課

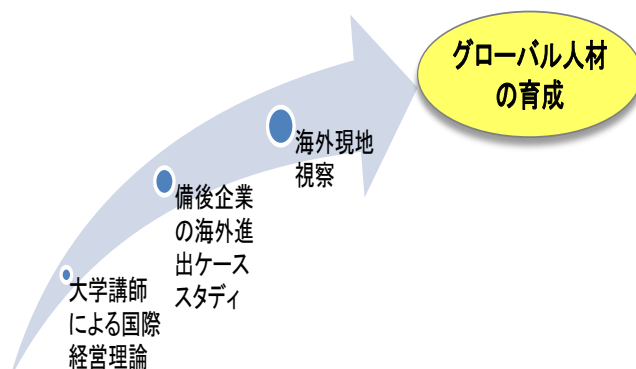
事業対象

大学生：
備後圏域4大学に在籍する学生
(尾道市立大学，福山大学，福山平成大学，福山市立大学)
社会人：
備後圏域の6市2町に在住もしくは勤務されている方
→新たに井笠地域を対象拡大

取組内容

日時：2018年9月29日(土)～12月1日(土)
毎週土曜日 全8回 + 企業見学バスツアー

月日	講義内容
9/29	国際経営の基礎知識(大阪商業大学総合経営学部 梅野教授) ケーススタディ1(備広島銀行)
10/6	海外子会社の自立的成長(大阪商業大学総合経営学部 梅野教授) ケーススタディ2(備シギヤ精機製作所)
13	グローバル化の中の中小企業の海外進出(兵庫県立大学大学院 経営研究科客員教授 中沢教授) ケーススタディ3(備北川鉄工所)
20	国際化・グローバル化にともなう地場産業地域の変容(福山市 立大学 塚本講師) ケーススタディ4(早川ゴム備)
27	ヒット商品に学ぶグローバルマーケティング・プロモーション 活動にみる各国の特徴(福山大学 大城講師) ケーススタディ5(ホーコス備)
31	企業見学バスツアー(カイハラ株式会社)
11/10	海外で働くということ(尾道市立大学 小川教授) ケーススタディ6(リョービ備)
17	国際経営における人材育成の課題-人材の現地化に着目して- (福山平成大学 小玉教授) ケーススタディ7(備キャスト)
12/1	ケーススタディ8(備サンラヴィアン)



福山市立大学教育研究交流センター 年報

vol.8 2018

発行・編集 福山市立大学教育研究交流センター
〒721-0964
広島県福山市港町二丁目 19 番 1 号
TEL(084)999-1115
FAX(084)928-1248
E-Mail:koryu@fcu.ac.jp
URL: <http://www.fcu.ac.jp/>

